

序

『政治学研究』は、慶應義塾大学法学部政治学科の学生による論文集である。創刊は1968年であり、実に半世紀以上もの歴史を刻んできたことになる。政治学科で学ぶ皆さんにはぜひ、メディアセンターに赴き、30年前、40年前の号を手にとってみて欲しい。今日塾で教鞭をとる教授たちが学生時代に執筆した論考も数多く収録されており、若かりし頃の教授たちとの知的対話を楽しめるかもしれない。

この半年も、塾の学生生活はコロナ禍の影響を大きく受けた。対面でのゼミは再開したものの、コロナ禍で学生の研究環境には、少なからず支障が生じた。塾のメディアセンターは徐々に従来のサービスを再開したが、国立国会図書館、他の研究所の図書館などは、概ね入場制限がかけられたままである。日本の学術誌や書籍の電子化や公開は、他国に比べても遅れている。また、移動が制限される中で、国内外でのフィールドワークもままならない。しかし、そうした状況下でも、学生たちは工夫を重ねて資料を集め、議論を重ね、頼もしく成長した。そんな学生たちの姿に多くを学んだ半年でもあった。なお、年間のゼミ活動の柱となってきたコンパや合宿、さまざまなイベントは依然として自粛を求められている。一旦途絶えてしまった教室外での教員と学生とのコミュニケーションが復活し、塾の知的コミュニティが潤いを取り戻すことを待ち望むばかりである。

本誌に収められた論文は、こうした困難な状況にあっても探究心を忘れず、研究に打ち込んだ学生たちの成果である。いつの時代も、自らの思考の結晶が活字になり、公刊されたときの喜びと興奮は変わるまい。一字一句を生み出すまでの試行錯誤、(共著であれば)ゼミの仲間と交わした激論の過程が蘇り、学問的成果を世に送り出す責任感と誇りで満たされるだろう。学部生時代にそのような感動を自らのものとした各執筆者の努力に、

心からの敬意を表したい。

最後に、政治学科ゼミナール委員会、法学研究編集委員会、慶應義塾大学出版会をはじめ、本号の編集にご尽力くださった全ての皆様に、この場を借りて御礼申し上げたい。

2021年11月

法学部教授・政治学科学習指導

小嶋華津子